

大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1) —教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して—

大 杉 成 喜

要旨： 本学教育学部教育学科では、平成26年度入学生より基礎・必修科目として「特別支援教育の基礎（第3 Semester）」を設定してきた。著者は平成29年度より同科目を担当し、第1回講義で2年生学生の4月時点での通常学級に在籍する特別な教育ニーズのある幼児児童生徒に関する知識・理解を調査してきた。3年間のデータでは各項目に年度ごとの差は見られなかった。また、「LDは軽度の知的発達の遅れが原因である」「アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある」「ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない」の項の誤答が多いことが判明した。これらの結果は、教員を志望する学生に特別支援教育の知識・理解を深めるための講義を進める上での参考となりえた。

キーワード： 大学生 特別支援教育 特別な教育ニーズ 発達障害

I 問題と目的

平成29年11月17日、「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成29年文部科学省令第41号）」（以下、改正省令と記述）が公布された。この改正省令は中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成27年12月21日）を受けてのもので、大学の創意工夫による質の高い教職課程の編成をめざして、教職科目の大括り化と内容等の改定について規定している。

教職科目の大括り化とは、教諭の普通免許状について、従前の8つの科目（1教科に関する科目、2教科又は教職に関する科目、3教職の意義等に関する科目、4教育の基礎理論に関する科目、5教育課程及び指導法に関する科目、6生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目、7教育実習、8教職実践演習）を、5つの科目（1教科及び教科の指導法に関する科目、2教育の基礎的理解に関する科目、3道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目、4教育実践に関する科目、5大学が独自に設定する科目）に改定するものである。この内容等の改定において、共通事項として、(a) 新たに独立した事項を設けたもの（・特別の支援を必要とする

幼児、児童及び生徒に対する理解、・総合的な学習の時間の指導法）、(b) 事項の内容を追加したもの（・情報機器及び教材の活用、・チーム学校運営への対応、・学校と地域との連携、・学校安全への対応、・カリキュラム・マネジメント、・キャリア教育）、(c) 大学の判断により事項に加えることを可能としたもの（・学校体験活動）が記された。改定省令に向け教職課程を有する各大学では教職課程再課程認定の取り組みが進められてきた。

改定の中で、新たに独立した事項「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」が加えられたことは、国際連合の「障害者の権利に関する条約」（以下、権利条約と記述）の批准との関連が大きい。わが国では、権利条約の批准に向けて、平成23年8月の「障害者基本法」の改正、平成24年7月の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（中央教育審議会初等中等教育分科会）（以下、報告と記述）の公示、平成25年6月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」の制定を経て、それに合わせて法制度が整備され、平成26年1月批准に至った。

権利条約の第24条教育では「(a) 障害者が障害

に基づいて一般的な教育制度から排除されないこと及び障害のある児童が障害に基づいて無償のかつ義務的な初等教育から又は中等教育から排除されないこと。」「(b) 障害者が、他の者との平等を基礎として、自己の生活する地域社会において、障害者を包容し、質が高く、かつ、無償の初等教育を享受することができること及び中等教育を享受することができること。」「(c) 個人に必要な合理的配慮が提供されること。」「(d) 障害者が、その効果的な教育を容易にするために必要な支援を一般的な教育制度の下で受けること。」「(e) 学問的及び社会的な発達を最大にする環境において、完全な包容という目標に合致する効果的で個別化された支援措置がとられること。」を目的と述べている。報告ではこれを実現するものとして「インクルーシブ教育システムの構築」が必要であると述べている。「インクルーシブ教育システム」とは、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」であり、「障害のある者が「general education system」から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要」と説明している。

さらに報告では「インクルーシブ教育システム構築のため、すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる。特に発達障害に関する一定の知識・技能は、発達障害の可能性のある児童生徒の多くが通常の学級に在籍していることから必須である。これについては、教員養成段階で身に付けることが適当であるが、現職教員については、研修の受講等により基礎的な知識・技能の向上を図る必要がある。」と述べている。今回の改正省令により新たに独立した事項「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」が加えられたのは、これに従ったものである。

この「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」は既存の特別支援学校教諭免

許状の教職課程での開設科目とは別に設定されるものとされる。「教職課程再課程認定等に関する説明会資料」(文部科学省,2018)によると、「幼～高の教諭に求められるものと、特別支援学校教諭に求められるものとは違うので充当できない。幼～高の教諭に関しては、通常の学級に在籍する、特別の支援を必要とする幼児児童生徒に関する理解を念頭に置いている。」と解説されている。通常の学級の担任が学ぶべき、通常の学級に在籍する発達障害等の「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に重点を置いたカリキュラム設定が必要となる。

本学教育学部教育学科では、平成26年度入学生より基礎・必修科目として「特別支援教育の基礎(第3セメスター)」を設定し、教育学部教育学科学生の卒業要件としてきた。これはそれまでの特別支援学校教諭免許状取得のための科目とは別に、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等の通常の学級の教員となる学生に対して、「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に関する内容をもって講義を設定したもので、改正省令が要求する内容に沿ったものである。「特別支援教育の基礎」は平成31年度(令和元年度)より教員免許状取得の必修教科となり、教員免許状取得を目指す本学文学部、現代日本社会学部の学生も必修となる。また、文学部、現代日本社会学部の教職課程は中学校・高等学校の教員養成を行うものであり、「特別支援教育の基礎」はそれに対応した内容で構成される。

報告に述べられているように、これらの新しい分野の学習は、現職教員研修と平行して実施されている。学生自身がこれまで学んできた分野以外のもも含み、また知識・理解・態度も個人差も大きいと考えられる。そこで、講義にあたってアセスメントを行い、学生の知識・理解に応じてその内容を精査して実施していく必要がある。

本稿は本年度まで実施した「特別支援教育の基礎(教育学部)」の授業開始時に実施したアンケートをもとに本学学生の通常の学級に在籍する、特別の支援を必要とする幼児児童生徒に関する理解について、現状と課題について考察する。

表1 「特別支援教育の基礎」のカリキュラム

第1回：オリエンテーション
第2回：国際障害観の変遷と障害者の権利条約，インクルーシブ教育
第3回：障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律と学校教育，基礎的環境整備と合理的配慮
第4回：特別支援教育の歴史，自立活動とは，矯正教育等広義の特別支援教育
第5回：幼・小・中・高等学校における特別支援教育，個別的教育支援計画と個別の指導計画，校内体制と特別支援教育コーディネーター
第6回：特別支援学校における教育（視覚・聴覚・知的障害，肢体不自由，病弱等の障害の重い子供）
第7回：特別支援学級における教育
第8回：通常の学級に在籍する特別な教育ニーズのある子供
第9回：自閉スペクトラム障害のある子供の理解と基本的対応
第10回：ADHDのある子供の理解と基本的対応
第11回：LDのある子供の理解と基本的対応
第12回：発達障害児への基本的対応，通級指導教室の指導と在籍学級の連携
第13回：授業のユニバーサルデザイン化
第14回：就学相談・進路指導～教育支援委員会
第15回：まとめ そのほかの様々な特別な教育ニーズのある子供の支援

(皇學館大学シラバス, 2019)

II 方法

1. 調査対象者

教育学部春学期（前期）開設の「特別支援教育の基礎」を受講者。平成29年度（2017）241名，平成30年度（2018）252名平成31年度（令和元年・2019）260名の計746名。配当年次は2年次春学期（前期）で，教育学部教育学科2年生全員が受講する必修講義である。

本稿では再履修者を除き2017年度（240名）2018年度（249名）2019年度（257名）の計746名を集計した。なお，特別支援教育コース学生についても，本授業以前に特別支援教育に関する授業は設定されていないので，開始時の講義等による知識は同様と考え調査対象に加えた。

2. 調査項目

調査項目は菊池（2011）をもとに以下の内容で構成した。

(1) フェイスシート

学年，性別といった基本的な項目に加え「将来の進路希望：教員，教員以外，進学」，「発達障害児との接触経験」及び「これまでの講義で発達障害に関して学んだか」について質問項目を設定した。

(2) 発達障害に関する知識問題

発達障害（自閉症，アスペルガー症候群，LD，ADHD）に関する知識を問う20問を設定した。問題は全て○×回答方式であり，発達障害に関する理解度をはかるものである。

(3) 発達障害のある子供の教育への考え

障害のあるに子供の教育や社会制度に対する自分自身の考えを問う27問を設定した。（本稿ではこのデータについては言及せず，(2)の知識の問題のみ取り扱う。）

3. 手続き

「特別支援教育の基礎」の講義の第1回目のオリエンテーションとして，シラバスの確認と履修上の注意等について説明した。ここでは発達障害についての詳細な説明は行わず，「配布している事前アンケートに記入してください。アンケートは今後の講義を進行するにあたって，みなさんが特別支援教育や発達障害についてどのようなイメージを持っているかを調べて授業の参考にするためのものです。成績等とは関係ありませんので，自分が思っていることを率直に書いてください。」と告げアンケートを実施した。

Ⅲ 結果

本稿ではアンケートの「(2) 発達障害に関する知識問題」について集計を行った(表2)。独立性の検定を実施したところ、3年間の各項目間で有意差のあったのは令和元年度の「14) LD 児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない」の項のみ(p=.0091)であった。

2年生より教育学部で特別支援教育に関する授業を受ける学生たちの授業開始時の知識・理解に

ついては年度間の差はほとんどないと考えられる。

次に、総回答者746名の各項目の結果を示す。

1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す(図1)

正答43.7%、誤答56.3%でやや誤答が多い。半数の学生が自閉症の定義を十分理解していない。

2) ADHD は、親の育て方など生後の環境により発症するものである(図2)

正答71.7%、誤答28.3%で正答が多いが、およ

表2：オリエンテーション時の2年生学生の発達障害に関する知識

	H29		H30		R1		総計	
回答者数	240		249		257		746	
平均正答総数(20問中)	13.2		13.2		13.5		13.3	
SD	2.26		2.32		2.20		2.21	
設問	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率	正答数	正答率
1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す	109	45.4%	111	44.4%	106	41.2%	326	43.7%
2) ADHD は、親の育て方など生後の環境により発症するものである	175	73.3%	183	73.2%	177	68.9%	535	71.7%
3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる	228	95.4%	240	96.0%	249	96.9%	717	96.1%
4) LD は軽度の知的発達の遅れが原因である	66	27.9%	59	23.6%	85	33.1%	210	28.2%
5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある	59	25.0%	74	29.6%	84	32.7%	217	29.1%
6) ADHD 児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである	193	80.8%	201	80.4%	196	76.3%	590	79.1%
7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい	187	78.3%	197	78.8%	200	77.8%	584	78.3%
8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である	114	47.9%	119	47.6%	125	48.6%	358	48.0%
9) ADHD は必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ	137	57.5%	142	56.8%	141	54.9%	420	56.3%
10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである	142	59.6%	138	55.2%	154	59.9%	434	58.2%
11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい	159	66.7%	176	70.4%	173	67.3%	508	68.1%
12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある	193	80.8%	216	86.4%	219	85.2%	628	84.2%
13) ADHD 児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる	216	90.4%	221	88.4%	227	88.3%	664	89.0%
14) LD 児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない	170	70.8%	180	72.0%	210	81.7%**	560	75.1%
15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない	67	27.9%	65	26.0%	89	34.6%	221	29.6%
16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている	130	54.2%	134	53.6%	156	60.7%	420	56.3%
17) LD の原因は、脳機能の障害である	184	77.1%	203	81.2%	207	80.5%	594	79.6%
18) ADHD 児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするのは、そういうことをやっけないということが理解できないからであることが多い	203	85.0%	215	86.0%	223	86.8%	641	85.9%
19) LD とは、書字と読字のみに障害を持つものである	205	85.8%	201	80.4%	205	79.8%	611	81.9%
20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれなこともある	224	93.8%	233	93.2%	241	93.8%	698	93.6%

**は前年度に対して1%水準で有意に多い。(p=.0091)

そ1/4の学生がADHDの原因を誤解している。

3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる (図3)

正答96.1%, 誤答3.9%でほとんどの学生が正答している。発達障害のある子供の中にも高い能力を示す者がいると理解している。

4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である (図4)

正答28.2%, 誤答71.8%で誤答が多い。多くの学生がLDは軽度の知的発達の遅れがあると誤解している。

5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある (図5)

正答29.1%, 誤答70.9%で誤答が多い。アスペルガー症候群の名前は知っているが、その定義についてまではよく知らない学生が多い。

6) ADHD児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである (図6)

正答79.1%, 誤答20.9%で正答が多い。ADHDの行動の原因が脳の機能の障害によるものであることを理解している学生が4/5をしめる。

7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい (図7)

正答78.3%, 誤答21.7%で正答が多い。発達障害のある子供は気づかれにくい場合もあることを理解している学生が4/5をしめる。

8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である (図8)

正答48.0%, 誤答52.0%で拮抗している。半数の学生が自閉症児は言語によるコミュニケーションのみが苦手だと理解している。

9) ADHDは必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ (図9)

正答56.3%, 誤答43.7%でやや正答が多い。半数の学生はADHDの定義を理解している。

10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである (図10)

正答58.2%, 誤答41.8%でやや正答が多い。しかし2/5の学生は自閉症が生育時の経験により発症すると誤解している。

1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す

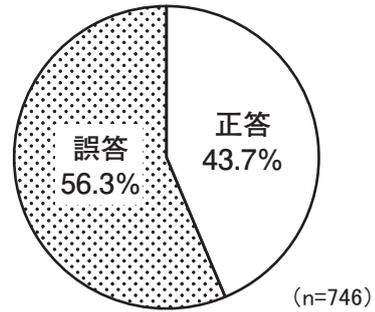


図1：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(1)

2) ADHDは、親の育て方など生後の環境により発症するものである

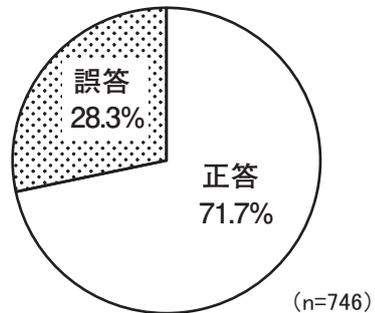


図2：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(2)

3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる

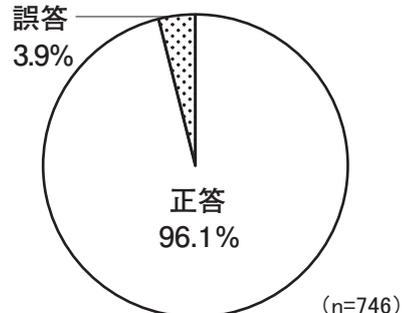


図3：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(3)

4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である

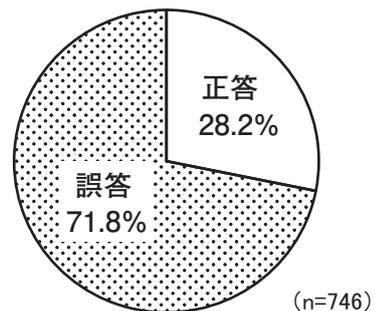


図4：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(4)

11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい (図11)

正答68.1%, 誤答31.9%で正答が多い。1/3の学生は発達障害児が非行や触法行為などを起こしやすいと誤解している。

12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある (図12)

正答84.2%, 誤答15.8%で正答が多い。アスペルガー症候群と自閉症が似た障害特性であることを理解している学生が多い。

13) ADHD 児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる (図13)

正答89.0%, 誤答11.0%で正答が多い。ADHDの特徴を理解している学生が多い。

14) LD 児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない (図14)

正答75.1%, 誤答24.9%で正答が多い。LD 児は学習面の困難だけでなく運動面等の問題も有していると理解している学生が3/4をしめる。この項のみ平成31年度 (令和元年度・2019) の正答率が前年より有意に多いことが示された ($p = .0091$)。

15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない (図15)

正答29.6%, 誤答70.4%で誤答が多い。発達障害児は自分の障害特性に自覚がないと考えている学生が多数をしめている。

16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている (図16)

正答56.3%, 誤答43.7%でやや正答が多い。しかし2/5の学生は自閉症のほとんどが知的障害を併せ持っていると誤解している。

17) LD の原因は、脳機能の障害である (図17)

正答79.6%, 誤答20.4%で正答が多い。LD 児の原因を理解している学生が4/5をしめる。

18) ADHD 児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするの、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い (図18)

正答85.9%, 誤答14.1%で正答が多い。ADHD 児が行動上の問題を生じるのは、適切な行動が理解できていないためであることを知っている学生

5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある

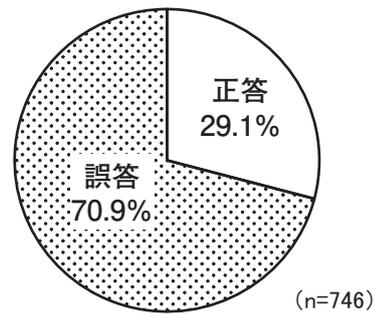


図5: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (5)

6) ADHD児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである

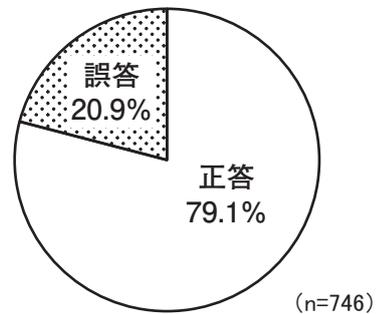


図6: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (6)

7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい

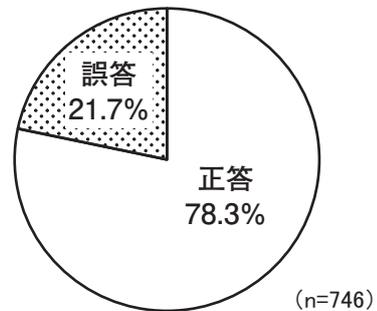


図7: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (7)

8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である

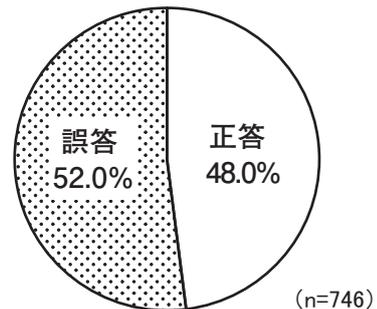


図8: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (8)

9) ADHDは必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ

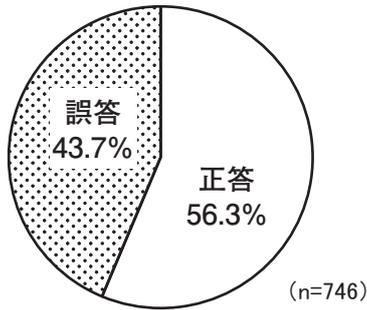


図9：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(9)

13) ADHD児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる

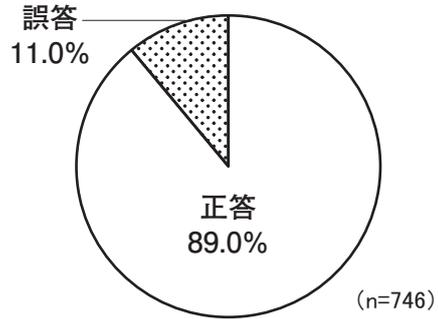


図13：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(13)

10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである

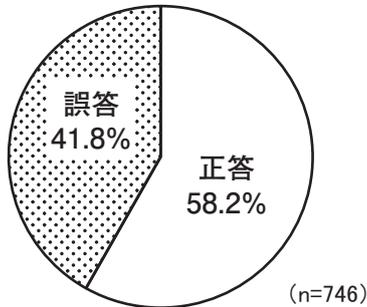


図10：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(10)

14) LD児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない

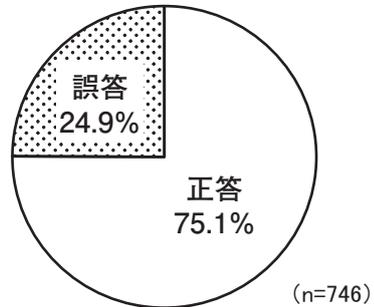


図14：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(14)

11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい

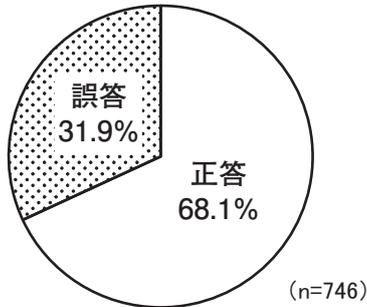


図11：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(11)

15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない

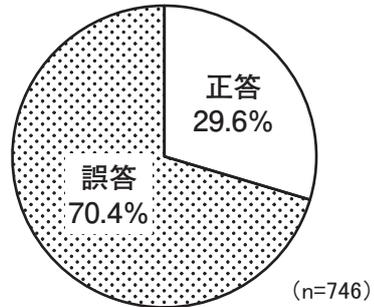


図15：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(15)

12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある

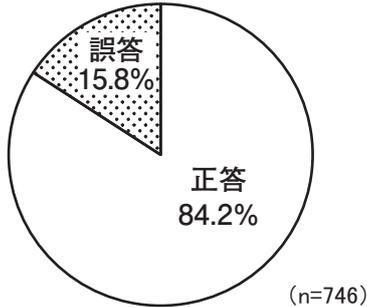


図12：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(12)

16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている

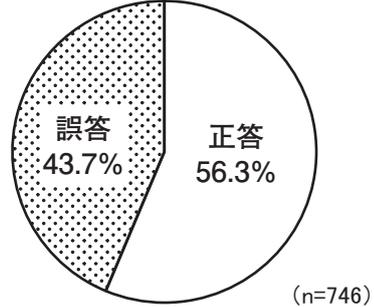


図16：授業開始時の学生の発達障害に関する知識(16)

が大多数をしめている。

19) LDとは、書字と読字のみに障害を持つものである (図19)

正答81.9%, 誤答18.1%で正答が多い。4/5の学生がLDは読み書きの障害だけでないことを理解している。

20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれないこともある (図20)

正答93.6%, 誤答6.4%で正答が多数を占めた。発達障害であることを気づかれないまま成人するケースもあることを理解している学生が大多数である。

IV 考察

1. 学生の回答傾向

3年続けたアンケートの正解率で有意な変化が見られたのは「14) LD児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない」のみであった。平均率は正答75.1%, 平成31年度 (令和元年度・2019) の正答率が前年より有意に多い ($p = .0091$) ことが示されたが、それ以外の差は見られなかった。本学学生の授業開始時の発達障害に関する知識は3年間でほとんど差はないと考えられる。

一方、質問ごとの正答率は様々であった。以下正答率の傾向の似たものについて考察する。

(1) 正解率のきわめて高い項目

正解率のきわめて高い項目 (90%以上) は以下の2項目であった。

- ・ 3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる (正答96.1%)

- ・ 20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれないこともある (正答93.6%)

これらの項目は、近年の発達障害理解啓発にかかるTV番組等で取り上げられる内容を含んでいる。これらのキャンペーンの効果の現れといえるかもしれない。

(2) 正解率の高い項目

正解率の高い項目 (70%以上90%未満) は以下の9項目であった。

17) LDの原因は、脳機能の障害である

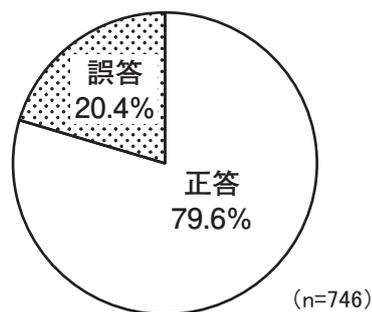


図17: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (17)

18) ADHD児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするの、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い

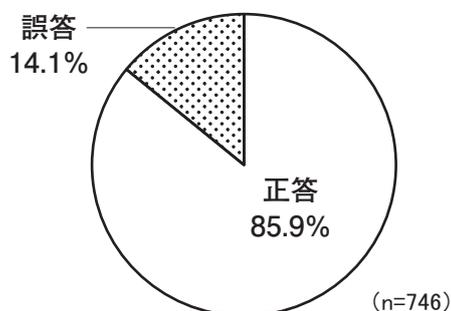


図18: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (18)

19) LDとは、書字と読字のみに障害を持つものである

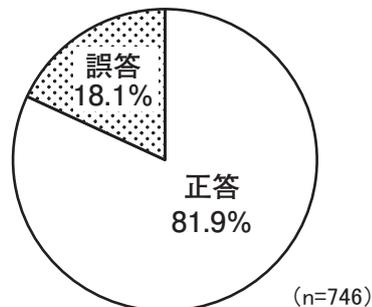


図19: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (19)

20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれないこともある

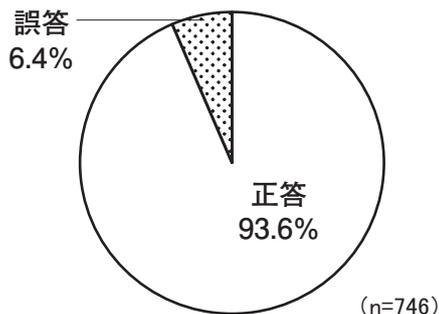


図20: 授業開始時の学生の発達障害に関する知識 (20)

- ・ 2) ADHD は、親の育て方など生後の環境により発症するものである (正答率71.7%)
- ・ 6) ADHD 児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである (正答率79.1%)
- ・ 7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい (正答率78.3%)
- ・ 12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある (正答率84.2%)
- ・ 13) ADHD 児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる (正答率89.0%)
- ・ 14) LD 児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない (正答率75.1%)
- ・ 17) LD の原因は、脳機能の障害である (正答率79.6%)
- ・ 18) ADHD 児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするの、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い (正答率85.9%)
- ・ 19) LD とは、書字と読字のみに障害を持つものである (正答81.9%)

これらは教員として知っておくべき基本的な事項であるが、七割以上の学生はすでに知識として持っていることがわかる。これはこれまで彼らが大学までに受けてきた教育や、発達障害の理解啓発の事業によるものと考えられる。

(3) 正解率のやや高い項目

正解率が50%よりやや高い項目 (50%以上70%未満) は以下の4項目であった。

- ・ 9) ADHD は必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ (正答率56.3%)
- ・ 10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである (正答率58.2%)
- ・ 11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい (正答率68.1%)
- ・ 16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている (正答率56.3%)

質問9) では ADHD については知っているが、

「『不注意』『多動性』『衝動性』のうちのいくつか」が7歳以前に存在し、社会生活や学校生活を営む上で支障がある。(文部科学省)」との定義の「いくつか」が全てを含むわけではないことを半数が理解していないことが判明した。質問16) では知的障害と自閉症とは別の障害であることが十分理解できていないと考えられる。質問10) では自閉症が過去に受けた心的外傷によって発症するものであると誤解している学生も半数弱いる。さらに質問11) では発達障害児が非行や触法行為などを起こしやすいと大いに誤解している学生も30%強存在することがわかった。

これらの内容については、これまで学生たちが受けてきた教育や理解啓発事業ではしっかりと押さえられなかったものと考えられる。

この理解は今後教員をめざし教育実習を行う学生たちの指導にも大きく関わってくると考えられる。講義の中で丁寧に説明し、理解を深めていく必要があると考えられる。

(4) 正解率のやや低い項目

正解率のやや低い項目 (正解率30%以上50%未満) は以下の2項目であった。

- ・ 1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す (正答率43.7%)
- ・ 8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である (正答率48.0%)

質問1) の「自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状である」の誤解は「Autism = 自閉症」と訳されて以来、字面から来る誤解の払拭が課題となってきた。2019年の世界自閉症啓発デー日本実行委員会<公式サイト>(一般社団法人日本自閉症協会, 2019) の「自閉症を知っていますか? ~誤解されやすい自閉症~」においても「『常に自分の殻に閉じこもっている状態』と考えられたり、『親の育て方が冷たかったということが原因ではないか』と思われることがあります。これは正しくありません。」「脳の発達の仕方の違いから『他の人の気持ちや感情を理解すること』『言葉を適切に使うこと』『新しいことを学習すること』など

が苦手であり、一般的な『常識』と思われることを身につけることも苦手です。このため、真面目に取り組んでいても、誤解されることがあります。」と誤解であることが強調されている。質問8)のコミュニケーションの問題と合わせて、自閉症の定義と特性について正しい知識を身につけさせる必要がある。

4月に始まる本講義ではその年の世界自閉症啓発デーの資料をもとに導入を行っている。平成31年度(令和元年・2019年)の日本の世界自閉症啓発デーのキャンペーンではセサミストリートの自閉症のキャラクタであるジュリアを全面にしたキャンペーンが持たれた。本講義でもジュリアのエピソードを多用し、自閉症の特性や配慮事項を印象づけるようにこころがけた。

(5) 正解率の低い項目

正解率の低い項目(正解率30%未満)は以下の3項目であった。

- ・ 4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である(正答率28.2%)
- ・ 5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある(正答率29.1%)
- ・ 15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない(正答率29.6%)

質問4)質問5)はLDやアスペルガー症候群の定義に関する設問であり、正しい知識を学ぶことで修正が可能と考えられる。

質問15)「発達障害児は自分の障害特性に自覚がない」は、本講義の核心と繋がる問題と考えられる。発達障害のある子供は自分の苦手なことでできないことに悩むことがあっても、それが障害特性であることに気づかず、周りも本人のわがままや努力不足と誤解している例も少なからず存在する。教員を目指す学生たちが、子供のつまずきや悩みに気づき手を差しのべられるようになることは大切なことであり、本講義の目標のひとつでもある。

講義では後半の第9回に自閉スペクトラム障害、第10回にADHD、第11回LDのある子供の理解と基本的対応について学び、第12回では発達障害児への基本的対応と通級指導教室の指導と在

籍学級の連携について言及する。そして、第13回に授業のユニバーサルデザイン化について学び、発達障害と認定されない子供も含めて、様々な教育ニーズに対応できることを設定した。

2. 学生の知識・理解をもとにした講義の設定

本調査では本学教育学部学生の授業開始時の発達障害に関する知識・理解は一定レベルに達しており、また3つの学年の差はないことが判明した。

平成19年度からこれまでの特殊教育から特別支援教育への本格的な転換が進められ、通常の学校、学級に在籍する特別な教育ニーズのある子供への対応が進められてきた。同時に、ともに学ぶ子供たちに対してもその理解推進が図られてきた。その成果はある程度現れていると考えられる。

本研究でも2年生開始時点で学生たちが特別支援教育に対して一定の知識・理解を有していることが判明したが、一方で多くの学生が誤解をしている項目も散見された。これらの項目については、一般社会への理解啓発キャンペーン等では改善できなかったものと考えられ、講義の中で丁寧に指導していく必要がある。

V おわりに

本稿では本学教育学部2年生学生の授業開始時の発達障害に関する知識について3年間の調査結果をもとに論じてきた。その中で、すでに知識・理解として保持しているものもあれば、不十分な項目も見つかった。教員養成を進める上で、知識・理解の不十分な点については、丁寧に学ばせていく必要がある。

平成30年度教職課程再課程認定を受けた「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」の講義の履修は、次年度である令和2年度の2年生(教育学部第3 Semester、他学部第4 Semester)から始まる。

本稿で得られた知見を参考に講義を進めるとともに、今後も授業開始時の学生の知識・理解・態度を調査し学生たちの学びを把握した上で、授業改善を進めていきたい。

参考文献

- ・外務省, 障害者の権利に関する条約 (平成18年12月国連採択, 平成19年9月日本署名, 平成26年1月日本批准), 2019.
- ・一般社団法人日本自閉症協会, 自閉症を知っていますか? ~誤解されやすい自閉症~, 世界自閉症啓発デー日本実行委員会<公式サイト> 2019. http://www.worldautismawarenessday.jp/htdocs/index.php?action=pages_view_main&page_id=167. (令和元年10月4日閲覧)
- ・文部科学省初等中等教育局教職員課, 教職課程認定申請の手引き (教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き) (平成31年度開設用) 【再課程認定】教職課程再課程認定等に関する説明会資料, 2018.
- ・教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令 (平成29年文部科学省令第41号), 平成29年11月17日, 2017.
- ・加藤宏, 教職課程での特別支援教科の必修化の意味するもの, 筑波技術大学テクノレポート Vol.23 (2), 27-32, 2016.
- ・中央教育審議会, これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (平成27年12月21日), 2015.
- ・障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律 (障害者差別解消法) (平成25年6月), 2013.
- ・障害者基本法 (平成23年8月改正)
- ・文部科学省, 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告) (平成24年7月), 中央教育審議会初等中等教育分科会, 2012.
- ・菊地哲平, 教育学部学生における発達障害のイメージ, 接触経験・知識との関連, 熊本大学教育実践研究, 28, 57-63, 2011.
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課振興係, 資料1 LD, ADHD, 高機能自閉症の判断基準 (試案), 実態把握のための観点 (試案), 指導方法, 2010. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1298207.htm (令和元年10月4日閲覧)

Status Quo of Knowledge and Understanding of College Students Regarding Special Support Education (1)

— A Questionnaire Survey in “Introduction of Special Support Education”,
Education Department —

OSUGI Nariki

Education Department of Kogakkan University has been offering a course of “Introduction to Special Support Education” as requirement since 2014. At the beginning of the class, this author researched knowledge and understanding of sophomore students regarding children with special educational needs who are enrolled in regular classes. The author found a number of misunderstanding of following statements, “the cause of LD is a mild delay in intellectual development” “people with Asperger’s syndrome have a delay in speech”, and “most children with developmental disabilities are unaware of their disability characteristics.” It was assumed that this course is helpful to provide a foundation for students who plan to become teachers with firm knowledge on special support education.

Keywords : Special Support Education/ Students of Education Department /
Knowledge and Understanding